

気になるテーマを気になるあの人はどう考える？オピニオンリーダーたちの意見をご紹介します！

企業と社員の対等な関係をつくり新しい価値観へ対応を

退職代行の実態は多様で、退職が困難な職場からの利用もあれば、会話が面倒という安易な理由からの利用もある。拡大の背景には、人手不足等による辞めにくさなどがあるが、一方で雇用をコモディティなものととらえる新しい世代の増加という側面もある。「退職＝悪」という風土で離職をけん制するやり方はもはや通じない。退職表明者にも成長後の出戻りを期待するなど、企業と社員の対等な関係づくりを支えることも人事の重要な役割だ。



秋山輝之 氏
株式会社ベクトル
取締役 副社長

ニーズの背景を考えることで防止策が見えてくる

「『最近の若い者は……』という不満を社内で述べるべきではない」という話をセミナーですることがある。年齢が若くても優秀な人材はいるため、上記のような不満は、採用・社員教育が失敗したことへの愚痴にすぎない。退職代行業の話題も同様である。企業の人事に携わる者としては、退職代行のニーズがある理由や背景を正面から考えることが、社員の早期離職の防止策を検討するために必要なのではないか。



高仲幸雄 氏
中山・男澤法律事務所
弁護士

今回のテーマ

「退職代行」時代の 早期離職防止

形だけではない対策で “本気度”を見せる

人材の定着には、メンタルヘルスやハラスメント対策も重要だが、そこに本腰を入れている企業と、旧態依然で形だけを取り繕っている企業の二極化が起こっている。形だけの制度改革や業績至上主義がまかり通っている職場では、「社員を大切にしない会社」と見限られてしまう。二極化を打破するためには、短時間の表面的なメンタルヘルス研修ではなく、1日レベルの核心を突いた本格的な研修をすべての職層で実施する本気さが必要だ。

見波利幸 氏

一般社団法人
日本メンタルヘルス講師認定協会（J-MOT）
代表理事



退職の意向を代わりに伝えてもらう
「退職代行サービス」が話題になっています。
賛否がある一方で、利用者は増加中。
こうした時代に人事は、社員の早期離職を防ぐために
何をすべきでしょうか。

当社の調査によると、入社1年内の離職は「入社後のギャップ」「上司との関係性」「業務量」に起因する。離職兆候を察知するには、上司ではなく人事など第三者の立場から、月1回程度の状況把握やフォローが有効だ。また入社後の1カ月間は毎日15分程度、新入社員が上司に質問を行う時間をあらかじめ設定しておくことも効果的だ。上司が丁寧に応答することで相互の関係性を良好にし、さらには入社後のギャップ低減にもつながる。

越田 良 氏

エン・ジャパン株式会社
『HR OnBoard』プロダクト責任者



気づきのエンタ

人材開発担当者にご紹介したいエンタメ情報です。
仕事の合間に息抜きにぜひ！

MOVIE

人事に役立つ映画



「白い巨塔」©KADOKAWA 1966

人間の本質と 組織の病理を描き尽くす

『白い巨塔』

1966年 日本
監督：山本薩夫
配給：大映

この度、山崎豊子原作『白い巨塔』が韓国版も含め6度目のドラマ化を果たした。往年のキャスト陣の凄さに対して今どきの俳優の層の薄さを嘆きつつも、つい観てしまうのは、ここに組織や人事に事寄せて人間の本質が描かれているからだろう。

そもそも原作が刊行されたのは1960年代前半で、主人公の財前五郎は高度成長期にのしあがってゆく野心家だが、その原点には戦後の貧しさがある。こんな横顔を感じさせてくれる俳優はさすがにいなくなってしまったが、1966年の大映映画版と1978年のフジテレビ版で財前に扮した田宮二郎は実にはまつていて文字通りの当たり役だった。

立場の違う人物への 共感と反発を楽しむ

映画版は財前が出世と名声のために医師としての使命をおろそかにし、医療ミスの訴訟で一時は追い詰められるも図太く逃げ切るまで描いていたが、実はこれは原作の正篇までのストーリーで、フジテレビの連続ドラマで描かれた財前の自論見の破綻と死は、後に出了原作の続篇のストーリーである。諷刺みなぎる政財界のブラックコメディを撮らせたら右

に出るものなしの山本薩夫監督による映画版は絶大な評価を得たが、正篇・続篇を描ききった1978年のフジテレビ版の方が、『白い巨塔』が愛され続ける理由がよくわかるかもしれない。

すなわち『白い巨塔』の面白さが上昇志向の塊のような財前のバイタリティにあるのは確かだが、本作の魅力は「才あれど問題の多き人物が権勢を得たときに、周りの人間がどんな態度に出るのか」という点にかかっている。まずフジテレビ版で田宮二郎と何から何まで対照的な山本學扮する里見助教授は、観る者に本来医師はかくあらねばと思われる誠実で潔い人物であるが、不器用であまりに無防備と言えるかもしれない。里見と真逆の、理屈抜きに金とコネで財前を擁護する義父の又一（映画では石山健二郎だがフジテレビ版の曾我廻家明蝶が圧巻）は到底共鳴できないが、頼もしき辣腕ぶり。

組織をだめにする メカニズムとエゴイズム

こうして財前という踏み絵をもって、立場の異なる人物たちへの共感と反発を観る者に委ねつつ、試してゆくところが『白い巨塔』の何よりの面白さではなかろうか。とりわけ法廷での虚偽の証言に走

る柳原医師（映画では竹村洋介だがフジテレビ版の高橋長英が光る）の正統篇をまたいだ態度の変遷は大きな見どころの1つだが、医師である前に組織人である柳原の逡巡と悲哀は観る者をぐいぐいと引くところだろう。組織をだめにするメカニズムと、その元凶であるエゴイズムについて、この財前と柳原の挿話は普遍的な掘り下げを見せていている。

実は当初、山崎豊子は原作の正統篇だけで完成していると思っており、柳原がおもて返り、財前が天罰のごとくに破滅してゆく続篇をあえて執筆するにあたらぬと考えていた。しかし周りの人間の立場を問う後半のストーリーこそが、高度成長期を遠く離れた今も『白い巨塔』が健在している理由なのかもしれない。



樋口尚文（ひぐち なおふみ）氏

佐賀県出身。映画評論家、映画監督。早稲田大学政治経済学部卒業後、電通に勤務。30年にわたり会社員をしながら映画評論家、映画監督として活動。著書に『大島渚のすべて』（2002年）他多数。映画作品に『インターミッション』（2013年）、『葬式の名人』（2019年9月公開予定）など。